

# ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

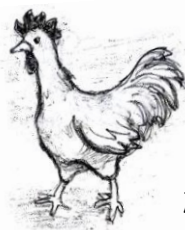
エイムズ唯子



## 第6回「少年たちの諸事情その2— ナイフとホーガン」

学校に折りたたみナイフを持ちこんで10日間の停学になったジュリアンが、教室に戻ってきました。合衆国の個別障がい者教育法は、障がいのある生徒が長期の自宅謹慎に値する違反をした場合、「障がい起因判断」という会議を開くよう定めています。その違反行為が障がいのせいなのか、問題行動は学校の指導不足のせいではなかったのか、の2点について検証するためです。教頭先生が来るのを待つ間に、「宿題はやったの？」と聞いてみました。停学期間中の宿題の1つは、ホーガンの模型工作でした。ホーガンとは、儀式や生活用に使われるナバホの伝統的な木造の平屋の建物のことです。登校に付き添ってきたお父さんがいうには、六角形につくってしまったので、やり直しているとのこと。「六角形じゃだめなの？」と聞くと、八角形が正しいと父はいいます。

数日前に見たジュリアンが住むホーガンは、何角形だったのだろう、とわたしは思いました。四駆車がつくる深い轍が交差して固まった、ひどくでこぼこの赤い土の道に揺られ、迷いながら探しあてたそのホーガンは、ゴミにかこまれていました。家庭訪問の時に公用車を出してくれる職員のラフィーナが、わたしの隣で言葉を失っていました。応対してくれたお祖母さんが、寝ているかもしれないから、中に入って呼んでみてくださいというので網戸に手をかけると、鍵のない木枠がべたりと開きました。迎えてくれたのは、ニワトリと2匹のネコ。「ジュリアン！」と呼んでみながら、目を走らせると、中央の薪ストーブがかろうじて務めを果たしている家財道具のようです。むきだしの土の床に直に置かれたマットレスといくつかのクッション。ダイニングテーブルとおぼしき場所は、ファストフードの紙コップや包み紙で盛り上がり、すえたようなにおいがします。



帰りの車のなかでラフィーナが「ショックだったでしょう」と声をかけてくれたとき、わたしが考えていたのはジュリアンのネコのことでした。いつだったか、名前がホワイトポー（白い前足）だと教えてくれたことがあったけど、2匹のどっちがホワイトポーだったろうと。雪はとけたといっても、網戸から吹き込む砂漠の夜風はまだ冷たいはず。体をすくめて、ネコをしっかりと抱きながら、少年は眠ろうとするのでしょう。手におえなくなってしまったゴミの山のなかで、ずしりと重いナイフを光にかざして眺めるとき、いろんなことを忘れられる16歳の子ども。

会議の冒頭。教頭の目を意識しながら、わたしはジュリアンに問いただしていました。「あなたの考えはどうなの。ナイフを学校に持ってきたのは、あなたが学習障がいだからなのかな？」。

障がい起因診断は、「障がい」という概念を被告にみだてた不自然な裁判のように、わたしにはみえます。学習障がいの特徴は、学業上の不振にとどまらず、反社会的な行動として表面化することもあると教科書には書いてありますから、ジュリアンが学校にナイフを持って来たことを、彼の障がい原因だったと結論づけることは可能です。しかし、重知的障がいなどで、判断能力が著しく低いことが明

らかな場合を別として、問題行動の原因が「障がい」だったという結論にはなりにくいのが実情です。それなら、なにが原因だったのか。会議はそこには深入りしません。学校を守るために必要な診断さえあれば、事足りるからです。「障がい」を有罪にしてしまえば、次には生徒の障がいに対応できなかった教員と学校の落ち度を認めることとなります。ここは、親が指導の内容に不服であれば、弁護士をたてて学校を訴えるのがあたりまえの国なのです。

ナイフを学校に持ってこさせたのは、自分の一部である(らしい)「学習障がい」なのかと聞かれたジュリアンは、黙っています。かたわらのお父さんも、自分の手に目を落としたまま、口を開く気配がありません。土木の仕事で黒く汚れてしまった大きな手です。同席したカウンセラーや教科担当の先生も、ジュリアンの顔色をみやるばかり。結局、この質問は教頭が引き取りました。「この学校に、君のような学習障がいを持つ生徒が何人いるか知ってるかい？その全員が、ナイフを学校に持ってくるのかな？そうじゃないね？」

ひとつめの山をクリアし、わたしは次の議題にとりかかりました。ジュリアンに対する学習指導が適切かつ十分だったかどうかを、検討しなければなりません。「ジュリアン、これは次の質問よ。『あなたがオレにもっとしっかり勉強を教えてくれていたら、ナイフなんか学校に持ってこなかった』って思う？」。

特別支援担当者として経験が浅かったころには、十分な指導をしたけれども、問題行動が起きてしまったということを示す根拠が出せず、結論ありきで会議を押し切ってしまったこともあります。会議の途中で方向を見失って立ち往生し、同席していた年下の先輩に助けもらったこともあります。でも今回は「勝算」がありました。12週間にわたって計57時間、ジュリアンの学習指導に関わった記録を資料として用意できていたからです。

わたしとしては、この質問は、教頭ではなく、ジュリアン自身に答えをだしてほしいと思いました。彼の抱える現実、たしかにひとりの子どもの手に余るでしょう。将来は父のような職人になるのが夢のジュリアンにとって、ナイフは自分の腕の確かさを証してくれる相棒、あるいは護身のお守りかもしれません。けれども自分の行為を他人のせいに行っている限り、彼は自らを律するチャンスを失い続けることになります。

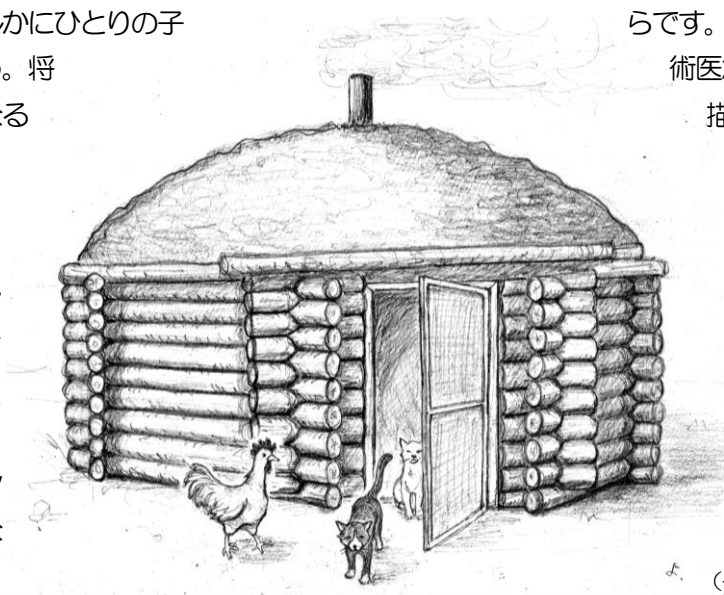
くだんの指導記録の資料は示してあります。それを認めて、「ノー」という答えを出せるのか、わたしはジュリアンの顔を覗き込むように体を乗り出していました。

ところが、ジュリアンの「ノー」は、すぐそこに見えているのに手の届かない探し物のようでした。質問の意味がわからないというのです。2回目は例を使って説明し、3回目は2択にしてみました。お父さんも加勢してくれましたが、それでもジュリアンは「I don't understand」。

同じ質問を4回くりかえすはめになったわたしは、あと何回、これが続くのだろうと心配になりながら、ジュリアンの思いがけない抵抗に、ちょっと嬉しくなって、小さく笑ってしまいました。家でも学校でも、のっぴきならないところに追いつまれているジュリアンが、精一杯の意地をみせているんだ、と思いました。「いったいこの会議はなんなんだよ！」と言いたいのかも知れない、そう思いました。大人たちにかこまれた会議の席で、わからないことをわからないと言えるジュリアンが頼もしくも見えたのです。「裁判」は、ジュリアンがやっと「先生のせいじゃない」と納得したところで終結し、次の2ヶ月間、彼が適切に行動すれば、バーガーキングの10ドルのギフトカードをご褒美にもらえる、という「契約書」に全員が署名してお開きとなりました。

ナイフとホーガン。尖ったものは男性、まるく奥行きのあるものは女性のシンボルとみなすフロイトの説を思い出したのは、ジュリアンが住みかになっているのは女ホーガンだと、ラフィーナに教わったから

です。ホーガンの土の床は、呪術医が、治癒のための砂絵を描く場所。ジュリアンが、立ち向かうことと受け入れることのバランスを上手にとって生きていけるよう祈ってほしいとお願ひしたら、メディシンマンはどんな砂絵を描いてくれるのでしょうか。



(イラストレーション:長谷川 陽)